

---

# 照れデレッ！！！

S.c

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

照れデレッ！！！

### 【Zコード】

Z5943Z

### 【作者名】

S.C

### 【あらすじ】

「ボクというか私は～～」

ボクと私の入り混じった独特なしゃべり方の麦沢。

僕はただの友達なんだからなつ！

いや違うかな？

じゃあ、僕は麦沢のなんなんだろ？

愛人？変人？保護者？

変人は字形的に近い氣もするけど……

## §1 何かの始まり、そして黄昏。

水峰 光（つまり僕）は燃えているように真っ赤に染まったマンション（否、億ション）を背にかばんを肩に引っ掛け制服姿で歩いている。世間一般では夏休み……僕の通う高校が私立であるというわけではなく。制服を着ているわけは彼（これも僕）の通う高校の夏季特別補習を受けたから……。

せっかくの夏休みに補習を受けることになるとは。

『あの時、ちゃんと試験勉強をしておけば

』

『後悔先に立たず

後悔が先にたつのなら、やつてたよ。そう僕は小さくぼやいた。目の前の信号は赤、小さく足踏み。

通う車両も少ない十字路の信号に僕は馬鹿正直に従つ。どの道急いだつてしまふがない、それがさつきそこのマンションに送った者の『決まり』ルール。僕はそれに従つことにした。

一本の道を端から端まで見通せる範囲まで、車が来ないとは珍しいことだ。案の定、一台の黒い車が、地平線から現れて十字路の横方向に抜けていった。それは、あまりに当然のこと。だが、その後に起こったことは違つ。

少女が一人ゆらーりと黄昏の十字路に浮かび上がった。

影から現れた。少なくとも僕にはそう見えた。

傘を差し、そこにレインコート。背丈からして、中学生といったところだろうか。

その子は信号を待つでもなく、僕をじつと見つめる。

おいおい、なぜにそういう見るんだ？ 背後に、別の人気がいてそれを見ているのかと思つて後ろを向いたがそこには誰もいない。再び視線を投げかけたときには。

その少女は忽然と消え去っていた。

「なんだってんだ？」

僕の口からそんな言葉が漏れるのも当然だった。

青い空だ、一機の飛行機が後ろに白い線を作り雲ひとつ無い空を空を一つに引き裂こうとしている。のんびりと着実に時間はただ過ぎる……

「みーーなあーみーーねえー、聞いとんのか？ 単位取らさんぞ」  
窓の外へ向けた視線を禿げかかった頭をした化学の教師がいる教壇に戻す、そのとき真面目に指名補習をこなす生徒たちもついでに目に入った。「みんな、真面目だなー」とか自分がサボつてること丸出しに出しつつ。僕は夏は暑いということで勝手に補足説明をことたらせることにした。クーラーの設定温度は二十八度、地球上に優しく、生徒に厳しい。これが終わってからは美術の特別補習、入学当初から三ヶ月、諸事情により絵を書かなかつたためだ ちなみに化学は単純に分からなかつた（なら、ちゃんと補習を受ける）。  
美術は夏休みに一枚絵を描くことで三か月分の提出点はクリアすることになるらしい、かなりずさんな評価システム。真面目に絵を描いていた人に申し訳ないこの仕組み、来年には授業で絵を書く人は随分と減るだろうな。今日はそのずさんな補習の説明を受けに来たのだった。化学？ 何それ。

早く終われと時計を見ながらぼーっとしていると。

「水峰、教科書三十四頁の練習問題を答える。今までの説明を聞いていれば分かるはずだ」

（えー……つと、何でしたつけ）

とりあえず、心内語で焦つてみた。口には絶対に出せない。焦り、あせり、アセり。冷や汗タラーリ、いやマヂで。

キューいち、てん。

「」の表の中で一番、イオン化エネルギーが大きいのはどれ？　He　H　Li

授業を聞いていたら分かるということだが、僕には全く分からない。傘を差した変な奴なんて考えている暇は無かつたのだ。

黒板も綺麗さっぱり消されちゃつてるわけだし。万事休す。このままでは『授業を聞いてなかつたからもう一回、君だけのために特別補習をしてあげよう（意気揚々）』みたいな展開になる、それはなんとしても避けたいのだが。

教室が止まる。

教室の沈黙が痛い。

やつべ、わかんね。授業なんて上の空で、空を見てたものだからまったく分からない。

（ヘリウムよ……）

そんな、小さな声が後ろの座席から僕にかけられた。こんなもの至極当然というよつた、まったく感情のこもつていないう。教室中、生徒（自分と後ろを除く）と教師の計七十八の瞳に見つめられる状況下では、それは神の宣託。

「ヘリウム？」

「そう、Heのヘリウムだな。宜しい……」

先生は心底、落胆していた。なんなんだろ、この人。補習をするのがすきなのだろうか。そして、めでたく、示し合わせたようにチヤイムが鳴つた。

授業が終わり開放感に包まれる教室。

一の二の教室の二行目の中列目が僕の席、三行目の四列目がさつきの声の席だつた。補習だから授業のときと同じ席に座る必要は無いのだけど、そう座つてゐる。

苗字は麦沢、名は晴。夏なのに長袖な超元気ガールだ、服装の紹

むぎさわ

はる

介は制服だからこんなとこ。

なんてつたつて、頭がいい。生徒の再三たる席替えの要求に答えなかつた担任のお陰で（？）、すつと近所だつた僕は麦沢の才人&変人ぶりはよく分かるわけだ、奇行というか一介の高校生を離れたその人となりはノートなんかを貸してもらつとすぐに分かる。

よく言う醤油や味噌を借りる仲の学校版で文房具を借りたり、ノートを借りたり、勉強を教えてもらつたり……ほとんど僕が享受する側の一方的な依存の仲だつたけど。

「また助けられたな。ありがとう。毎度、毎度、感謝感激雨アラレだ」

「ドウイタシマシテ」

感情のいまいちこもらない様子で棒読みライクで答えられた。ペラペラと化学の参考書をめくる姿は優等生。が、補習に来ている、とはいつても、それが直接『成績悪い』にイコールで結び付けられるかといえばそれは間違いで、成績自体はトップクラスを誇る。そんな人が何故特別補習にいるかと申させていただければ『成績良い』が原因にあることをこの素つ氣無さとともに紹介したい。

「つてなんで麦沢がこんなところにいるんだ。お前の成績はどれも良かつたはずだが」

既知の事実だ。詳しくは左記参照だ、あとで説明しよう。

「何故か呼び出された。ノート提出後に呼び出されたから、きっとノートが悪かったのだろうな。帰ってきたノートにはどれも『ノーヒー』が霧状に吹かれていたぞ、『フイタ』って奴だな」

「なにを書いたんだ、お前……」

それより『フイタ』って実際にするやつがいるとは。

「現代国語には自作小説を、古典には自作の漢詩を、数学には未証明問題の解法、英語には売れ筋小説の英訳、化学には新元素の発見に関する論文、世界史には現代の一年に一回国の首相が変わる様子と、軍人皇帝時代の目ぐるましい変化を重ね合わせたりしたエッセイを書いたつてとこだ」

麦沢という人はどうやらオールマイティーらしい。ノートにはそれ以外に何も書かなかつたのだろうか？ こいつ、何様のつもりなんだろ？

「神様、かな？ それも女神」

「読心術も心得ていいのか。強敵だ。

「じゃあ、今日から敵だな<sup>ライバル</sup>」

「読むなつての。だいたい、お前と張り合つても勝てるきしないつて」

「そうちかな、少なくともボクより優れていることが、ボクというか私からすれば多々あるのになー」

水峰君が気づいてないなら良いや、とそうち麦沢は付け足した。なんだらうそれは、釈然としないコメントだ。

「ああ、そうちだ麦沢は美術の方はどうなんだ」

「どうつて、どうもしないつて。ボクは先生には一つ作品を仕上げて出したら、それでオッケー貰つちゃつた…………テヘツ？」

どんな絵を描いたのだろう、すじく気になる。ピカソとかゴッホの再来とか言われてたりして。麦沢のことだ期待は裏切らないだろう。今度、いつ文化会館（展示はそこで行われる）に行こうかと今から思案を巡らせた。とても楽しみである。ところで、『テヘツ』なんだらう『テヘツ』つて。

続けて。

「で、さつきのことだが……水峰」

不敵な笑みを浮かべる、麦沢。そこには少女的あどけなさとその奥の、世界から一步身を引いた今世界からいなくなつたとしても後悔はしない。そんな、危険さを感じ取れる。少しつづけばそこから崩れ去るような不安定な姿。そんな彼女が僕にさつきの素つ氣無さを詫びるような、そんな遠慮を見せながら一言言つて、存分な間を置いて口を開いた。

「今日も、放課後はボクに付き合つてくれないかな。ボクというか

私の好きな作家の新刊が出る日だから……」

恩を売ったのだから、恩を売れというか返せという決まり『ルール』。

『ボク』と『私』の混在した独特なしゃべり方。入学当時は、『ボク』だけだったが最近私を使う機会も多くなっていると僕は思う。

「いいよ、どうせ後は家に帰るだけだし」

「ありがと。私は校門前で待つとくけど遅れるなよ。口約束も契約のうちだからな」

麦沢の念を押しは、相手に絶対の忠誠を誓わせるような意味がある。約束は徹して守る、これもまた麦沢の決まり『ルール』。

去り際に『べ、別ニ水峰ガイナクテモ。一人デ行ケルンダカラナ、勘違イスルナ』と頼まれてもいのに棒読みでツンデレをやってのけ。美術の補習もある僕を残し一足早く学校を出て行つた。

## §1 何かの始まり、そして黄昏。（後書き）

にゃん！ 新連載だつ！

先に他のを簡潔させりつて話だけどなつ！…！

今日は既に原案はあるので滞りなく更新できれり。  
「無気力無関心（」）の更新が滞つたときにこれは投稿していく  
たいなあ。

僕は校門へ向かっている。

遅れるなよ、と言いながら時間の指定はなかつたことに苦笑しながら。

麦沢のそういうところが僕は心配だ。僕も手短に美術の説明を聞いてきたつもりだそれでも先生が途中で会議に行つたりで、一時間はかかった。僕は足を速める、麦沢はきっと待つてゐに違ひない。そういうやつなのだ。

『人を待つのは良いけど相手を待たせるのはいやなんだよ、ボクは前に、約束より三十分ほど早く校門前にいたことがあった。そのときも、麦沢はそこに居た。その時の台詞だ。その後にこうも続けた。

『ボクは人を信じられない。だから、先に人が待ち合わせの場所に居るとホツとする。だけど、待つてくれた子の不安を考えると居た堪れないんだ。だから、ボクは人を待たせたくないんだ』

やはり、麦沢はそこに居た。

「あつ、水峰君。行こうか」

私服姿の麦沢も珍しい。今日は時間があつたから、家に帰つて着替えてきたというところなのだろう。まあ、驚かなくていいだろう。人類さえ超越しているかもしれないからな、メイビー。

ベレー帽のような帽子にプリントの長袖Tシャツ、デニムの夏ファッショն、詳しいことは僕は知らないから深く答えられないのは残念だ。言えることとしては、制服の型から抜け出した彼女はそんなことないはずのに、実年齢より幼く見えた。

駅前の本屋、麦沢のお求めの品はそこにある。実際、学校近くの本屋にあるのだが、『品揃えが悪いのよあそこは（麦沢談）』らし

いので、麦沢が行きたがらない。

その麦沢はとくとすでに、本屋の棚の奥へとタタタと駆け出している。

僕は、その背に「帰るとおは声かけるよ」とだけいって僕は暇つぶしに興じることとなつた。

雑誌の「ローナー」、都市伝説の本。何気なくパラパラと捲つて棚に戻すことを繰り返す。そのなかの一つに『かさおばけ』の記述を見つけ戻しかけた手を止める。それはなにやら、僕たちの住む市で起きている事件らしい。ロロリで構成された記事にはさまでまな情報が載つてゐる。少女やら、黒尽くめの男やら、共通イメージとしていることは傘を持っているということぐらい。全くまとまりの無い文をよく記事にしたものだ。

『かさおばけ』、僕はそのワードに心当たりがある……

「よつ、水峰。ボクの買い物は終わったよ。ボクというか私を家まで送つて頂戴」

その手に持つた本屋のロゴの入つた袋は本で角ばつていて。袋のふくらみは文庫本を横にして、縦に並べると五冊分ぐらいの大きさだ。

「ひりやあ、また随分買い込んだな」

麦沢が一冊本を取り出す。イラストが表紙いっぱいに描かれてゐる、世に画つラノベだった。

「なに? その奇異の本は。私は作家目指してんだから参考資料よ、参考資料」

「ハウツー本は買わないのか?」

「現代はエエの時代だよ。ネットを見れば親切なサイトさんがあるから大丈夫!」

「へえ、そんなもんなのか……」

僕たちが本屋から出たとき空は朱色に染まつていた、昼でもなく夜でもなく黄昏。これより明るいと毎、暗いと夜。血の色みたいで

いやだつた。

「なんか、不気味ね……」

鼻に土の匂いが香り。いやな感じのする雲も低い建物によつてと  
ころで隠れた地平線の上に見える。

「急ぐか……麦沢も傘持つてないだろ?」

「そりしきようか」

麦沢は上の空に答える。

§過去、夢＝未来（後書き）

一ヶ月止めてたつけ？更新（：：：）

## 閑話休題。

僕らが向かっている麦沢の家はマンションだ。それも四十階の高層マンションの最上階。一人暮らしには驚きだが、その人なりを考えると格段におかしいというわけではない。

何故ここに住んでいるのかと考えれば、こんなにお金のかかりそなところに住んでいるのだから両親は共働きで、海外とはいわず他府県に単身赴任中、生活費は送金してくれているということも十分考えられる。とりあえず一人暮らしには相応でないマンションだということは分かっている。（……僕が何故こんな人の事情を知っているのかとかはつづけまい）ほし。日々の会話からの情報収集の結果なのだから

今にも雨の降り出しそうな暗雲がもうすぐそば、雨のこおいが強くなってきた。なので、僕はマンションのントランスまで麦沢を送ることにした。

「なんだか“いつも”ゴメンね。水峰君の家って本当は向こうな同じ方向だからなんて言つて。ボク、というか私もありがたけど……やっぱり、好意にあやかれないと云うか……私は。どうしても人の行動には裏があるとかそう考えてしまつんだ。君もそうなかなつて……」

「……」

言葉の端々に考えるような間。

気付かれていたか。まあ、薄々嘘をつけるような相手じゃないとは分かつてたけどさ（裏があるという意味でなく）。

「ゴメン……こんなこと言つて。君がただ優しいだけなのに

「麦沢、僕はただ」

それを言つるのは止めてくれというように。麦沢はさえぎつた。

麦沢は片手で数字の書かれた盤をさわり。キーを解除。

「麦沢！」

僕の呼びかけに応じず、片手を挙げて去っていく。

雨が地面をたたき始めた。

### §3 独白（後書き）

よいしょっとまとめて更新だよつ！

他の小説も可愛がつてやつてください w

http://nocode.sysosetu.com/n5543  
m/  
http://nocode.sysosetu.com/n0523  
p/

『白々しい台詞はいいよ』  
諭すような口調。時々見せるどこか悲しげな顔。虚勢を張った姿。人のことを分かつた気になるといつのは高慢なことだ、特にこれまでどうと無く生きてきた自分が言つといつのがそもそも間違いだらう。それでも僕の主觀に基づくといつのならそれは、哀しい台詞だった。

『×××××してね』『あなたを一生××しまわ』

「…… どれもこれも、抽象的だ。具体的には言わなくていい、そんな行為だけならサルでもオッケー、（それが××の内訳なら）全生物軒並みクリアのハードルの低さだ。それより何よりどれより××つてなんでしょうかね。」

え。……自分の言つてることが分からなくなつてきた末期かもしんね

再び、信号待ち。もともと交通量の少ないこの道に信号機なんて付ける必要あつたのだろうか、手信号の方が効率いいんじゃないのか、と理不尽きわまりないことを言つてゐる。ただ雨に降られながら、ただ立ち続ける。

ハハ。これだけ降られるとシャワーみたいだよな、気持ちいいよ。アハ

止めどなく僕の背中を流れしていく雨。  
もう、びしょ濡れだつた。

あら、天然のシャワーはもう終わりか？ コインいれたら延長も出来るのだろうか。コインの投入口を見つけてやろうと天を仰ぎ見る。

黄昏の朱色が、夜の黒になっていた。

「目の前のお兄ちゃん、何でこんなところに突っ立つてんの？ 変な人だね」

雨音だけだつた世界に人の声が入つた。その声が敵意からではなく敬意から成り立つていて、僕の緊張は緩和される。僕は後ろを振り向く。

イテツ、頭になんかぶつかつた。紺色の布地に金属の骨、さつきはこれを夜空と間違えたのか。僕は馬鹿なのか？

「傘？」

「うん、傘だよ。英語で言うならパラソル？」

「どつちかつていうとアンブレラだらうな、雨傘だし」

パラソルはどうちかといふと口傘だ。

「ふーん、なんかゾンビが沸きそうな名前」

少女は僕よりかなり背が低く、見上げるような感じだ。中学生だろう。それより、もっと幼くも見える。僕は小学校から上がつてきただばかりのぴかぴかの一年生だと結論付けた。

ところで、この謎少女、傘をさしてゐるのにサイズの合っていないレインコートを羽織る意味があるのだろうか。夕立なのだから対豪雨用の装備は必要がないはずだ。ん？ レインコートの襟元から生肌が見える、かなり際どく。

…………『気にしない、気にしない。』レインコートのしたつて何も着…………『なんて聞けるわけがない。真面目にならう真面目に。』

でも、このシチュエーション聞いたことがあるな。ほら、えーっ

と……そりだ、かさおばけに背後を取られてグシャツつてやつ。じやあ、この子がかさおばけ？　いや、まさかね。

「雨宿りさせてくれるところ」とでいいのか、JJのシチューハーショ

ン

「まあね、ただし十五分までは無料だけだ……」「だけど？」

「それ以上だつたら缶ジュークおじつ」

「魂をとるつてこつちやつたりしてこの子。

健気過ぎて逆に怖い。簡単に誘拐されそうだ。

そのとき、バシャバシャ走つてくる人影一つ。

「み、水峰。傘いるだろ、傘。いきなり雨降つてきたからさ……」

麦沢さん、啞然呆然。雨宿らせの少女と雨宿りの少年=あいあいあがさ

「……年下趣味なんだ、水峰君つて。幻滅はしないよ、むじろあつのままの君を見れてよかつた」

「いや、待て」「

皮肉たつぱりに言われた。キャラは統一したりびつだりうが。「ジョークだよ、ホンジュラステイックな」

「……」

意味がわからなさ過ぎて、シッコめねえ。

「で、その子は結局なんなの？」

「ああ、こいつ普通に話しあけやがった。

分からぬい、といあえず雨宿りさせてくれる感じの関係とでも言つておこづ。

「分かつた。でボクが詳しく聞いてみる」

麦沢はかさ少女のほうを向いて質問を始めた。夕立は勢いを弱めている。

「まず、名前からボクに教えてもらつてもいいかな？」

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5943n/>

---

照れデレっ！！！

2011年7月5日03時31分発行